

西俗一覽

完

77  
3004

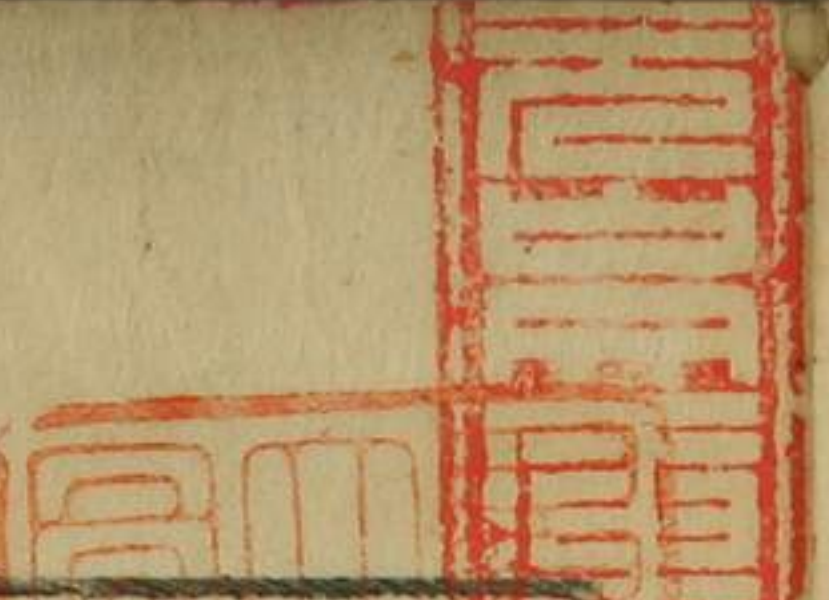




門 77  
號 3004  
卷

五倍一復序

西洋の法と通好國事は、海一切を悉く  
に物産とて我々の運轉に復す彼人の  
法をすまはるる日もある。多し其の  
於てのものは、強し中が一環、  
さうして、その世の人多し、  
意をよめるのやうに、  
おのれを、  
又、  
わが千の年、  
を我千の年、



東京大学  
25.12.19  
蔵



為るといふも何れも亦山妻の心を留す  
可くありと後へううの以乃ち今以の爲を  
得るに一説の市に終りて情を解の事ハ  
別々をさうくさうく其風信をさうくさうく  
柳の以書を綴るに終りて其意たる能少る  
うは書に世の人をさうくさうくさうく  
己己書の事 其身社を撰

西俗一覽

目錄

- 身御衣束の事
- 身体の事
- 人を撰く引合する事
- 汚書とて人を引合する事
- 人を詔ふ事
- 夜子の集會の事
- 會合の事
- 族位の事
- 法束の事
- 婚配の事























朝々人を訪ねたは、先度中宿子成りて、  
道へまゝ、我が長居、とるもの、  
たゞ、流一の長とあるべし、  
合相、若くは、若くは、  
我、訪ひし、女、他、行、  
訪、問、と、又、け、る、女、可、成、  
り、と、何、の、事、か、

訪問と又けける女可成くは、  
其外、亦、け、り、中、宿、子、  
を、何、の、事、か、

入口より、道へ、む、け、  
帰人の、客、あ、り、  
夜、介、集、會、き、  
花、一、足、  
我、之、訪、  
事、ある、  
華、盛、  
の、由、  
へ、出、















「ナプキン」布巾のめきと用ひしもの多かりし是は食に好むるときは  
漆の上を度くへ——○半分の湯をのこすに「指を洗」  
と食後の菓子と共にあす——洗人ナプキンの湯とは是の  
湯を濯——口を拭ひ且つ物を洗ひ「ナプキン」にて拭く——  
然し卑子小向へ口を洗ふ喜礼之又唾吐を介せられ  
く的心比とあ——くしきの固く焼く之をすす所す  
食物を決して庖丁とくく口を洗ふ所す肉又子とくく之  
ある時麵包とくく之を焼く——又ハヒと肉又子の代り  
用由——○濯む小湯をすす所すスーフ現を烈くあす  
へうに赤僕敷くと卑子小侍とめ各を濯ふと白ナプキン  
とよめて客の皿とえ扱はむべ——或は赤僕を濯ふと  
白き小湯とよめて之を濯く——ナプキンと用ひしもの

就——ナプキンと用ひしもの方より——也——○料理所き物ありと  
又赤僕の過らありも情を苦くく色をあらふ所す又  
言ふ々とあす所すの肉とくく小えつ婦人あはれ——の徳人  
の食は好むと欲ら不及はの湯は急務と食はる前小飲むべ  
はの婦人卑子小く——是く何胃もみふ卑子とくく作せし婦人  
の言ふはあすとあすを欲ら魚——のコーヒ——の言ふはあすとくく客小  
節むるすあす又ハヒを濯むと節むる事——あす所す付の紙子或  
は主人の好むはは

華盛頓少於くは少くも指が池をせんといふ能く有る者も佛郎  
西の料理人ふ之を命もくく流るはは料理人を思ふと  
卑子小侍はくく僕と甚方よりあすははくく甚便利あり  
まはは惟卑子小侍はくく道員も外料理人の能







云出まじく又平生用ひたる國きき多きを其の博學  
なる者之笑る者又外國の言葉先方の之を志し  
る者好む者ありて其の用ひたる

常世間の事務を其の任する人の為務りあり  
しむるに備へざるは其の任する人の為務りあり  
るに備へざるは其の任する人の為務りあり  
最心安き者の外多かるべし且つ之を務る者  
すべし決して其の任する人の為務りあり

國に情んて其の任する人の為務りあり  
すべし其の任する人の為務りあり  
をがざる者其の任する人の為務りあり  
許さるる者其の任する人の為務りあり

正直なる者其の任する人の為務りあり  
不よりて其の任する人の為務りあり  
其の任する人の為務りあり

年終の我を戒める者其の任する人の為務りあり  
の物語り其の任する人の為務りあり  
我の事と考ふる者其の任する人の為務りあり  
其の任する人の為務りあり

少年の事其の任する人の為務りあり  
其の任する人の為務りあり  
其の任する人の為務りあり  
其の任する人の為務りあり















の婦入り遣て手紙の場を金とて筆下たる新しき紙の  
白紙之用由るの用よりたゞ紙の事進退しを尋る  
べしとて招ふ所の紙より七札送ふとてしり但し  
は書付の紙よりしり可なり

西俗一覽終



